

氏名	橘 英範
授与した学位	博士
専攻分野の名称	文学
学位授与番号	博乙第 4574 号
学位授与の日付	令和 7 年 9 月 25 日
学位授与の要件	博士の論文提出者 (学位規則第 4 条第 2 項該当)
学位論文の題目	白居易の詩と女性一身近な女性を中心として一
論文審査委員	教授 (主査) 遊佐 徹 准教授 土口 史記 講師 米田 有里 教授 土屋 聰

### 学位論文内容の要旨

学位論文「白居易の詩と女性一身近な女性を中心として一」の内容は以下の通りである。

中唐の詩人白居易には、生涯を通じて愛したとされる女性が何人かおり、そのうち何人かの女性に関しては、従来も日中両国で研究が蓄積されてきたが、ただ、その注目は主にその女性の事績と著名な作品への影響に注がれるのみで、より広範な作品や心理面への影響についての詳しい考察は行われてこなかった。

本論文は、白居易の身近な女性が彼の作品や心理面に与えた影響の一端について知ることを試みたものである。研究の概要と方法について記した序論部分に続いて、本論部分は大きく三部に分かれている。

まず第 1 部は、白居易の初恋の相手ともいえる湘靈に関して論じた部分である。

そのうち第 1 章では、先行研究に基づきつつ、湘靈の事績について新たに検討し、さらに彼女との恋が破局に終わったことが、白居易の詩にもたらした影響について論じた。具体的には、湘靈の思い出と結びつく題材が、破局の後、作品の中で長年にわたって避けられてきた可能性について考察したものである。作品の中に詠じられたことに湘靈との恋愛が影響していることの研究は従来にも行われているが、作品の中に詠じられていないことに影響している可能性の指摘は、従来の研究には見られないものといえる。

続く第 2 章では、白居易が妻の楊氏と結婚した後も、折りに触れて湘靈のことを詠ずる詩を作っていることに着目し、これに妓女を詠じた同時期の詩をも加えて、妻である楊氏・恋人である湘靈・妓女という、立場の異なる三者の女性の描き方について、その違いの考察を試みた。それぞれの女性像の研究は行われてきたが、同時期のものを比較するのは、新たな視点となっている。

第 3 章と第 4 章は付論として、湘靈と交際していた頃の白居易の詩が「青春の文学」と呼びうるものであることについて論じた。第 3 章では「鋭敏な感受性」「孤独感」「自己否定」という三つの面から論じ、4 章では、死者を悼む詩を取り上げて第 3 章の内容を補足した上で、この当時の白詩が、中国古典詩にはあまり見られないとされる青春の文学になりえた理由について論じた。従来の研究ではほとんど顧みられてこなかった初期の作品を、青春の文学という視点から検討し直したものである。

続く第Ⅱ部は、白居易が最後に愛したとされる家妓の樊素に関して論じた部分である。

まず第5章では、樊素と白居易の関係について検討を行い、樊素が宴席に侍り始めた頃に別れた陳結之という女性がいたことを明らかにし、結之の面影を樊素に重ねていたことを指摘する。陳結之は、従来の研究ではほとんど触れられてこなかった女性であるが、その重要性を指摘したものとなっている。

第6章では、白居易と陳結之・樊素の関係を踏まえて、劉白の「楊柳枝詞」の連作を読み直すことを試みた。二人の家妓との関連を踏まえて読むと、白居易の連作が樊素との掛け合いになっている可能性があるという指摘は、筆者独自のものである。

最後の第Ⅲ部は、女性描写について論じた部分である。

第7章では、白詩における女性の胸を詠じた表現に着目し、その表現の変遷を追うことで、白居易は女性の胸の美の発見者というべき詩人であり、白の表現がその後の詩に影響を与えたことについて論じた。従来は主に授乳器官に過ぎないと考えられていたとされてきた女性の胸が、実はあまりにも官能的な部位と考えられていたがゆえに詩の中に詠じるのが憚られていたことを明らかにしている。

次の第8章では、白の代表作の一つ「琵琶引」に見られる、酒がスカートを汚すという表現に着目し、その表現がやはり官能的な表現であり、背後に白の深層心理が隠されている可能性について指摘した。強引で無理のある解釈かもしれないが、「琵琶引」の新たな読みの可能性を提示してみた。

第9章では、付論として嫁と姑に関する表現を取り上げた。中唐以前には嫁と姑の関係が詩に描かれることがあまりなかったが、中唐の時代になるとその状況が質的にも量的にも大きく変化し、さまざまな状況の嫁と姑を描いた詩が大量に作られており、白居易もその一人であったことを指摘した。唐詩における嫁・姑の描かれ方に関する先行研究は見当たらないようであり、その点で独自性を持つものとなっている。

最後に結論では、本論部分をまとめた上で、諸田龍美氏の研究に基づき当時の時代背景について触れ、中唐という新たな時代に白居易の新たな文学が生み出されたと結論づけた。

## 論文審査結果の要旨

学位論文「白居易の詩と女性—身近な女性を中心として—」の審査は上記の審査委員によって7月7日15:30より文法経1号館103号室で開催された。

本論文は、「要旨」にも記したように、白居易の文学生涯において従来あまり注目されてこなかった身近な女性達との交流、交渉とその詩作の関係を丹念に検討し、また白居易の心象に迫った全III部9章からなる労作である。論文の骨格部分は国内の様々な学術誌に発表した論文から構成されており、学界の評価にさらされてきた既発表の研究成果をこのたびまとめ上げたという点において十分に質的な保証が担保された内容となっている。構成面でも予備論文の段階に比して一段と工夫を凝らし、画像資料も加えるなど一編の学位論文として整った体裁に仕上げることに成功している。

審査会では、主査が司会を務め、冒頭、被審査者から予備論文審査時に審査員から提示された質問および意見に対しどのような修正、対応がなされたのかについて詳細な説明があつたのち審査に移った。

まず、各審査員の一致したところでは、形式面では、鋭い着眼点によって見出したテーマについて豊富な資料の提示しながら丁寧に論証するというスタイルでありながら、読みやすい文体と構成で論旨がスムーズに理解できる、という評価、内容面では、中唐に起きた文学的変化を白居易の眼差しや意識を通じて描くことに成功している、という評価が示された。前者に関しては文字通り「文は人なり」という受け止める方も可能であるが、後者に関しては、一貫して白居易の研究に携わり続けてきた被審査者の見識が遺憾なく発揮されている。

白居易の文学に早くから親しみ、影響を受けてきた我が国では、これまで広汎かつ龐大な白居易研究の成果が蓄積されてきたが、このたびまとめられた学位論文は、白居易の詩作に窺い知れる身近なものに対する優れた観察眼という特徴を踏まえながら、それを身近な女性との交流、交渉というテーマにおいて捉え直し、白居易における「詩と真実」のあわいを描ききったという点において新しい研究方向を示したものとなっている。

また、本学位論文が取り上げた若き白居易の意識や苦悩は、単なる白居易研究上のトピック、中国文学研究という域を超えて、世界文学との関係性もイメージさせる研究内容となっている。

審査員の個別の感想、評価としては、第1章の「氷の涙」という表現は、和歌文学の理解を促進させる可能性がある、唐代の法制度や身分制度等、社会史、社会文化史的背景を精査し、盛り込むことによって論に厚みがでる可能性がある、といった指摘があった。

以上のような審査内容をもとに合議を行い、全員一致で提出論文は学位授与に相当する形式、内容を備えている旨確認した。

なお、学位に付記する専攻分野は文学である。